在日外国人留学生の適応に関する研究(1)

—異文化適応尺度の因子構造の検討—

田中共子*・高井次郎**・神山貴弥***・村中千穂***・藤原武弘***

*広島大学留学生センター・**広島大学大学教育研究センター・
***広島大学総合科学部人間行動研究講座

(1990年10月31日受理)

A study on the adjustment of international students in Japan(1)

—A factor analysis of cross-cultural adjustment scale—

Tomoko TANAKA, Jiro TAKAI, Takaya KOHYAMA,
Chiho MURANAKA and Takehiro FUJIHARA

ABSTRACT

Psychological studies on adjustment of international students in Japan has become increasingly important in recent years because of the abrupt inflow of students from abroad. The results of existing research in this area, however, are not consistent over studies. One reason for this inconsistency is sampling bias due to limited subject numbers and under representation. A second reason is the wide variety of instruments used to measure the concept of cross-cultural adjustment, which has been defined differently by the investigators concerned. This study approaches adjustment through various scales, attempting to grasp as many factors as possible that may underlie the concept, and by attaining a sample that is as close to the characteristics of the international student population in Japan. This report deals with some descriptive statistics and results of factor analysis done on the adjustment scales.

二十一世紀初頭目標の留学生10万人構想に向けて，年々留学生の数は急増している。現在日本の高等教育機関に在籍している留学生の数は41,347人（平成2年5月1日現在，文部省統計による）であった。しかし，留学生の数が増える一方，受け入れ国として，これらの学生に有効な留学経験を保障する努力は決して十分とはいえない。日本の留学政策の改善は激増する留学生数に追いついて行けない現状にあり，あらゆる学問的領域からの留学生研究が急がれるべきであろう。

日本における留学生の心理学的研究は海外と比べ，歴史が浅い。高井（1989）は在日留学生の適応問題に関する論文を総括しており，主要の12篇の論文を紹介し，研究間の結果の一貫性の無さを指摘している。こうした原因としては，これらの研究間の調査対象者は等質ではなく，多くの場合は欧米出身者とアジア出身者などの地域別比重が母集団におけるそれぞれの比

重と異なっている点にあると考えられる。また，同じ留学生であってもさまざまな宗教的，文化的や社会的な背景を有しているので，日本における適応状況も異なる。留学生の出身国を考慮せず，一概にまとめて取り扱うことは多くの問題があるため，できるだけ母集団の特徴を正確に捉える必要性が指摘できる。さらに，留学生の国籍によって，彼らに対する滞在国の人々の態度が異なることも念頭におかなければならない。特に，日本の場合，西欧文化への憧憬が東南アジアなどの発展途上国からの留学生に対する差別を生んでいることが岩男・萩原（1987 c）の事例研究で明らかになっている。このように，留学生の国籍を限定しない研究であれば，母集団の特徴を忠実に表わすサンプルを抽出するか，これが困難であれば，対象者を出身地域別に分けて分析することが重要である。

留学生を出身地域別に分けている研究は全体の半数にも及ばないが，これらの結果からいくつかの共通する地域差が明らかにされている。岩男・萩原（1977 a）はアジア系学生が欧米系学生よりも，留学における生活状況と日本人の留学生に対する態度に不満をもっていることを，期待と現実のギャップの測定で実証している。また，岩男・萩原（1977 b）の日本に対するイメージの調査では，前者が後者よりも日本の先進性をより高く評価する一方，親和性を低く評定する傾向が見いだされている。さらに，岩男・萩原（1987 b）は帰国した在日留学生を対象に調査を行い，アジア系留学生が欧米系よりも全体的に留学に対する不満を表わすこと，および前者が後者よりも適応に対する障害度を低く認知することを見いだしている。彼らはこのように相反する結果を明らかにしている。その他に，モイヤー（1987）は文化変容からなるストレスを出身地域別に比較しており，アジア系と欧米系の学生の間の差について検討している。この研究から，前者は「留学生に対する日本人の日本語理解の期待」と「留学生の日本文化の無知さに対する日本人の無許容姿勢」により悩まされており，後者は「外国人に対する先入観に基づく扱い」からストレスを感じていることが明らかになった。

在日留学生の適応をめぐるもう一つの注意点は「適応」の定義である。すなわち，「適応」とは何を意味するのかが問題であって，高井（1989）が指摘するように，適応の測定指標のバラつきが研究間の結果の一貫性の無さのもう一つの原因である。例えば，岩男・萩原（1977 b, 1978, 1979, 1987 a, 1988 a, 1988 b）は留学生の日本人に対するイメージを滞在時期別に分析しているが，このイメージの変化が「適応」と同一視されており，適応の指標として妥当であるかどうかが問題である。前述したモイヤー（1987）の研究では心理ストレスが適応の指標となっているが，その他の研究では適応の諸側面を調べる適応目録が試みられている（ヒックス，1988; 上原，1988; Takai，1988 等）。このように，異文化適応の概念は広義なものであって，その定義は研究者の数と同じくらいバラついていると考えられる。そこで，本研究は異文化適応を多数の要因からなっていると把握し，従来の研究には網羅されていない，異文化適応にかかわる多数の変数を測定する。変数としては，デモグラフィック要因，言語能力，対人的志向性，ソーシャル・サポート，ストレス，ストレスへの対処行動，孤独感，心身の健康，ソーシャル・スキル等をあげて，これらを適応の指標として扱うことにする。

本研究は，こうした問題点を踏まえて実施された調査の調査実態を報告すること，および異文化適応の指標として用いた尺度の構造を明らかにすることを目的にする。従って，本研究は異文化適応にかかわる各要因がどのように関連しているかを検討する上での基礎研究として位置づけられる。

方　　法

調査対象者　東京以西の国立大学7校（東京大学，埼玉大学，横浜国立大学，京都大学，神戸大学，広島大学，山口大学）の留学生450名を対象とした。

調査方法　協力を依頼した大学のうち，承諾して必要数を知らせてきた大学に，用紙を送付した。質問紙の配布・回収を主に行ったのは，各大学の事務の担当セクション，あるいは，学部等の留学生の担当教官，日頃留学生と接触の機会が多い教官，留学生宿舎の担当者や責任者であった。調査時期は，1990年3月（広島大学），5月（他6大学）。記入済み用紙は，各大学ごとにまとめて返送された。回答総数は，237（回収率52.7％）であった。質問紙は，日本語（ふりがなつき），およびバック・トランスレーションの手続きを経て翻訳された英語版の二種類を用意した。

調査内容　調査項目の詳細は Table 1. に示されている。なお異文化適応に関する各尺度は，以下の基準に従い選定した。まずストレス評価項目は，モイヤー（1987）の，在日留学生のストレス尺度の7因子をもとに作成した。異文化への適応評価項目は，山本（1986）が Baker（1981）の研究を参考にして開発した，留学生活における適応尺度の因子分析結果を参考にして6領域とした。孤独感尺度は，藤原ら（1987）がＵＣＬＡ孤独感尺度から選出した，一次元性が保証されたものを用いた。対人志向性評価項目については，行動的（活動的，受動的）・対人的（協調的，マイペース）な自己の志向性にあった満足感を得ることが適応に重要である，とした佐藤ら（1989）の知見を参考にして筆者らが尺度を独自に作成した。不適応症状の評価は，心身の自覚症状と不定愁訴を含めた。ストレス対処項目については，姚・松原（1989）の，留学生の生活ストレッサーについての調査で，使用頻度の高かったもの，ならびに広沢（1985）を参考にした。

Table 1.　調査内容

フェイスシート
- 性　　・年齢
- 出身地：①中国　②韓国　③台湾　④東南アジア　⑤西欧　⑥中南米　⑦中東　⑧アフリカ
- 学籍：①学部　②大学院　③研究生　④教員研修　⑤日本語研修
- 専攻：①理科系　②文科系
- 留学のステイタス：①日本国費　②自国政府奨学金　③私費
- 日本語力：①上級　②中級　③初級
- 日本滞在年数：①－1年　②1－2年　③2－3年　④3年－
- 同居の有無
- 質問紙の言葉の理解度：①100％　②90％　③70-80％　④70％以下

ソーシャル・ネットワーク成員に関する質問項目（複数回答，最大10人まで）
- 性別
- 年齢：①20才以下　②20-30才　③30-40才　④40才以上
- 国籍：①同国人　②他の外国人　③日本人
- 回答者との関係：①指導教官　②同じ研究室の人　③チューターの学生　④大学教職員　⑤学生　⑥ホストファミリー　⑦家族　⑧親戚　⑨他の友人・知人

Table 1.　調査内容（続き）

・援助期待：①できる　②どちらともいえない　③できない
　1）日本語　2）日本の文化・習慣　3）勉強・研究　4）相談・励まし
　5）一緒に楽しむ・出かける　6）物・お金　7）生活の情報
・関係の満足度：①たいへん満足　②やや満足　③やや不満足　④たいへん不満足
・依存度（どちらがより相手を頼りにしているか）：①あなた　②ほぼ同じ　③その人
・接触回数：①毎日　②～週1回以上　③～月1回以上　④～3カ月に1回以上
　⑤それ以下

異文化適応についての測定項目

(1)　ストレス評価項目
　ストレス量：①非常にストレス～⑤ストレスなし
　1）日本人の曖昧さ　2）日常の生活
　3）生活圏の日本人との関係　4）日本語
　5）日本人の話題の理解　6）生活情報の入手
　7）日本語練習の機会作り　8）日本人との人間関係
　9）外人としての特別視　10）病気やけがの不安
　11）日本人からの拒否

(2)　適応評価項目
　適応：①かなりよい～④かなりよくない
　1）学習・研究の環境　2）学習・研究の進展
　3）日本語習得　4）日本文化理解
　5）心身の健康　6）人間関係

(3)　孤独感：①けっして感じない～④しばしば感じる
　1）私は人とのつきあいがない　2）私は頼りにできる人がだれもいない
　3）私は今誰とも親しくしていない　4）私は仲間はずれにされていると感じている
　5）私は大変引っ込み思案なのでみじめに感じる
　6）私には知人はいるが気心の知れた人はいない

(4)　対人志向性評価項目：どちらが好きか，あるいは近いか（二肢択一）
　1）人と協同／一人でマイペース　2）家にいる／外に出る
　3）もとより友人が多い／少ない　4）日本の友人は多く欲しい／あまりいらない
　5）物事の成功・不成功の帰属は自分／状況

(5)　不適応症状評定項目
　不適応：①たいへん感じる～④まったく感じない
　1）満足感　2）ここちよさ　3）ホームシック　4）いらいら
　5）疲れ　6）不安　7）胃腸など体の不調

(6)　ストレス対処項目：①よくする～④まったくしない
　1）人の助言や助けを求める　2）状況に合わせ自分を変える
　3）求めるものを変える　4）気晴らしをする
　5）趣味や勉強に打ち込む　6）涙・日記等で気持ちを放出

(7)　ソーシャル・スキルに関する項目
　ソーシャル・スキルの獲得：①よくあてはまる～④まったくあてはまらない
　1）日本人の行動の理解・実践ができる　2）日本人に不自由なく主張できる

結果と考察

本研究では，まず今回の調査対象者となった留学生の実態を，主にデモクラフィック要因から明らかにした。ついで，これら留学生のソーシャル・ネットワークの成員の特性，およびこれら成員に対する留学生の認知を明らかにした。さらには，本調査で用いた異文化適応に関する各尺度の因子構造および異文化適応尺度全体の因子構造を検討した。

1．調査対象者の実態

本調査対象となった留学生の性別の構成比を示したのが Fig.1. である。男性が約 70 %を占めており，文部省による全国集計（平成元年 5 月 1 日現在）の 63.7 %よりもやや多い割合である。年齢に関して言えば，その範囲は 18 才から 43 才であり，Fig.2. に示されるように，25-30 才と 30-35 才の年代の割合が高く，35 才以上の年代の割合は低い。

Fig.3. は，留学生の出身地の構成比である。中国，東南アジア，韓国，台湾のアジア地域の留学生が，全体の 77.0 %と高い割合を示している。しかし全国集計ではアジア地域の留学生は 88.1 %であり，これと比較すると約 11 %低い。一方，中南米（全国 2.5 %），北米・欧州・オセアニア（全国 7.5 %）地域の留学生の比率は本調査での方が高い。

次に留学のステイタスであるが，全体では，日本の国費留学生が 48.1 %，私費留学生が 38.3 %，外国政府派遣留学生が 12.7 %である。しかし，Fig.4. に示すように出身地によってその構成比は大きく異なる。中南米，北米・欧州・オセアニア，東南アジアの留学生は国費である割合が非常に高いが，台湾，中国，韓国の留学生は私費である割合が非常に高い。

Fig.5. には，日本滞在年数別の構成比が示されている。1 年未満の割合（37.0 %）が最も高い。また滞在年数別にみた日本語力の構成比が，Fig.6. に示されている。この図からも明らかなように，滞在年数が増えるにつれて初級の比率が減少し，上級の比率が増加している。Fig.7. は学籍，Fig.8. は専攻の構成比である。学籍に関しては，大学院生と研究生で全体の 72 %を占めている。また専攻に関しては，理系の学生の方が文系の学生よりも約 10 %多い。これに対して全国集計では，文系（60.5 %）の方が理系（39.5 %）よりも多い。

Fig.9. は，質問紙全般に対する理解度の構成比を示している。90 %以上の理解度を示す留学生の割合は 67.7 %に達している。また，70 %以下の理解度と回答した留学生は 7.2 %であり，多くの割合の回答者が高い理解度を示している。

以上の対象者の実態報告から，各デモクラフィック要因でそれぞれ十分なサンプルが得られていることが明らかになった。これを全国集計（平成元年 5 月 1 日現在）と比較した場合には，必ずしも母集団の構成比を反映したサンプルとは言い難い。しかし，それぞれのデモグラフィック要因の構成要素はほぼ母集団と同じものが得られており，今後これらのデモグラフィック要因に基づいて適応状態を比較することは十分に可能であろう。

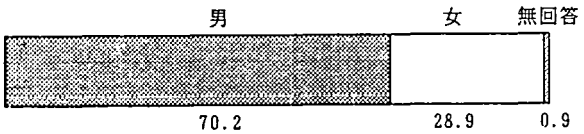

Fig.1. 性　　別（%）

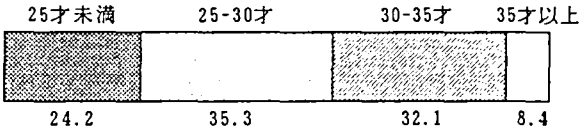

Fig.2. 年　　代（%）

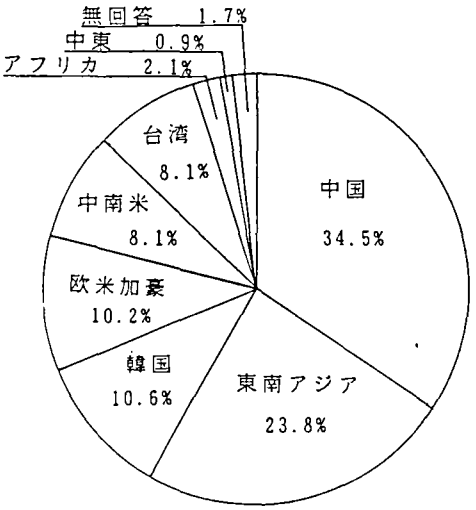

Fig.3. 出　身　地

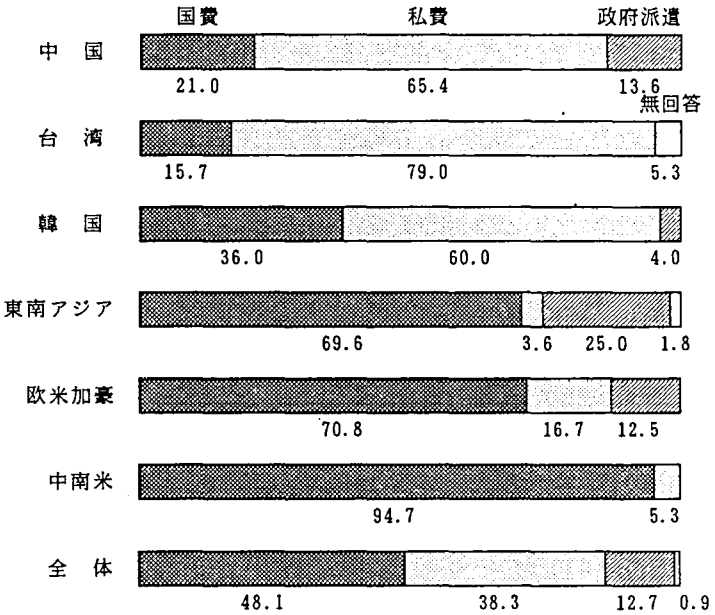

Fig.4. 出身地別にみた留学のステイタス（%）

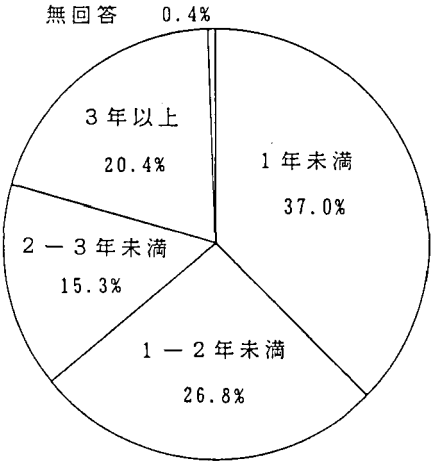

Fig.5. 日本滞在年数

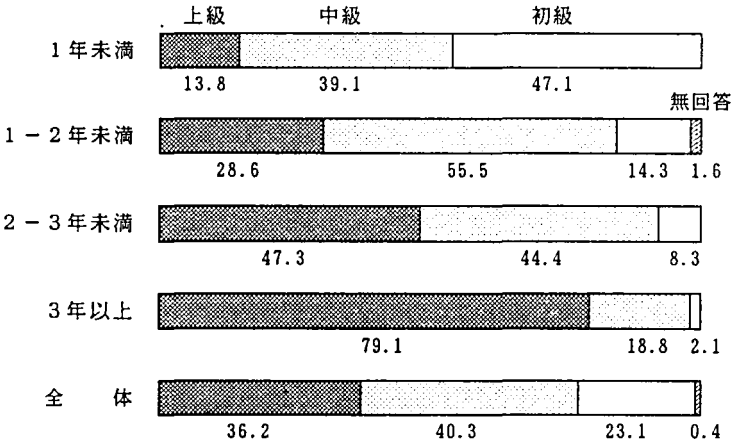

Fig.6. 日本滞在年数別にみた日本語力（%）

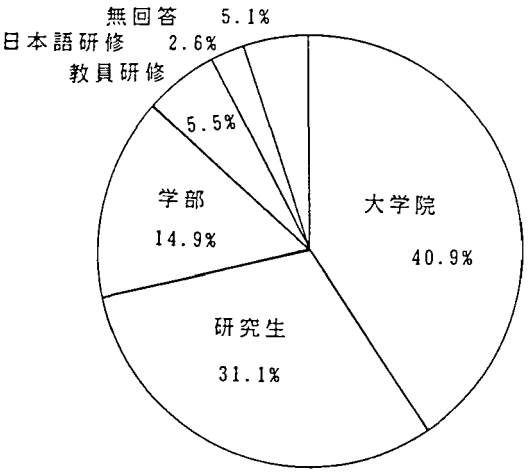

Fig.7. 学　　籍

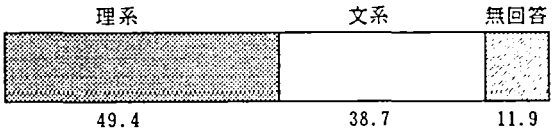

Fig.8. 専　　攻（%）

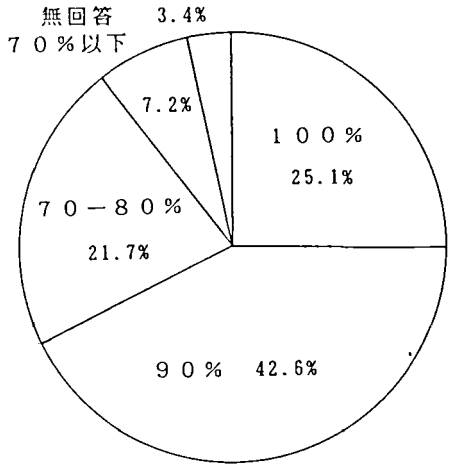

Fig.9. 質問紙の理解度

2．ソーシャル・ネットワークの成員

日本で対象者にとって「大切な関わりのある人」を最大10人まであげさせた。本研究では，これらの人物を留学生のソーシャル・ネットワークの成員であると考え，その特性およびこれらの人物に対する留学生の認知を明らかにした。以下のソーシャル・ネットワーク成員に関する集計結果は，複数回答に基づくものである。

まず，ソーシャル・ネットワークの成員の性別については，Fig.10. に示すように，全体では男性が女性の約2倍を占めている。しかし，これを留学生の性別にみてみると，女性留学生の場合は男女の構成比がほぼ等しいのに対して，男性留学生では男性が女性の約3倍となっている。またネットワーク成員の年代に関しては，Fig.11. に示すように，全体では20代が46.5％とほぼ構成比の半分を占めている。しかし，こうした傾向は30代以上の留学生には見られず，20代のネットワーク成員の割合が減少する一方で30代のネットワーク成員の割合が増加している。

Fig.12. は，ネットワーク成員の国籍を留学生の出身地別および全体でみたものである。全体の構成比から，ネットワーク成員の比率は，日本人，同国人，他の外国人の順に多いことが示される。またこの傾向は，北米・欧州・オセアニア地域を除くすべての出身地の留学生に共通している。留学生とネットワーク成員の関係については，Fig.13. に示している。ネットワークを構成している割合が最も高いのは友人・知人（32.7％）であり，ついで学生（23.2％），指導教官（11.8％），同じ研究室の人（10.9％）というように大学関係者の割合が高い。

Fig.14. には，計7項目に関して，留学生がネットワーク成員に対して持つ援助期待の構成比が示されている。「日本語」，「日本の文化・習慣」，「相談・励まし」，「一緒に楽しむ・出かける」，「生活情報」については50％前後のネットワーク成員に対して“期待できる”と認知し

ている。これに比べて，「物・金」(25.6 %)，「勉強・研究」(41.8 %) に対して“期待できる”と認知されるネットワーク成員の割合は低いといえる。

留学生が自分とネットワーク成員のうちどちらの依存度が高いと認知しているかを調べ，それを集計した結果が Fig.15. である。依存度が等しいネットワーク成員の割合が最も高い (55.4 %) が，それについでは留学生自身の依存度の方が高いと認知しているネットワーク成員の割合が高い (35.5 %)。

Fig.16. は，ネットワーク成員との接触頻度に関する構成比を示している。ネットワーク成員の 68.8 %とは週1回以上会っており，ネットワーク成員との接触の多さを示している。また，Fig.17. は接触頻度別および全体でみたネットワーク成員との関係の満足度の構成比である。全体では 90 %以上の成員との関係において，満足である（“たいへん満足”あるいは“やや満足”）と認知していることが示されている。しかし，接触頻度が 3 カ月 1 回より少ない場合には，不満足である（“たいへん不満足”あるいは“やや不満足”）と認知されるネットワーク成員の割合が他の場合より高くなっている (22.5 %)。

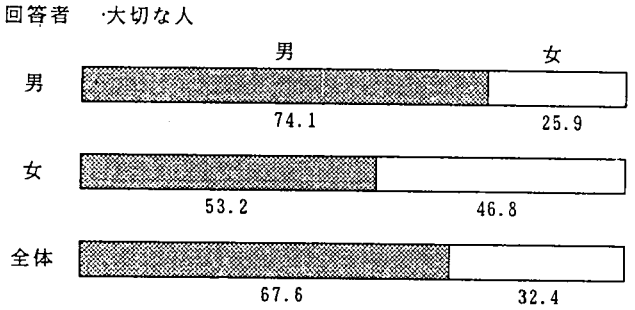

Fig.10. 回答者の性別にみた大切な関係にある人の性別（%）(複数回答)

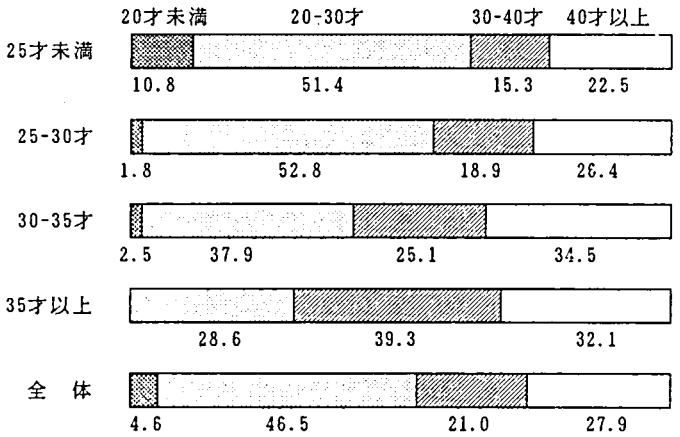

Fig.11. 回答者の年代別にみた大切な人の年代（%）(複数回答)

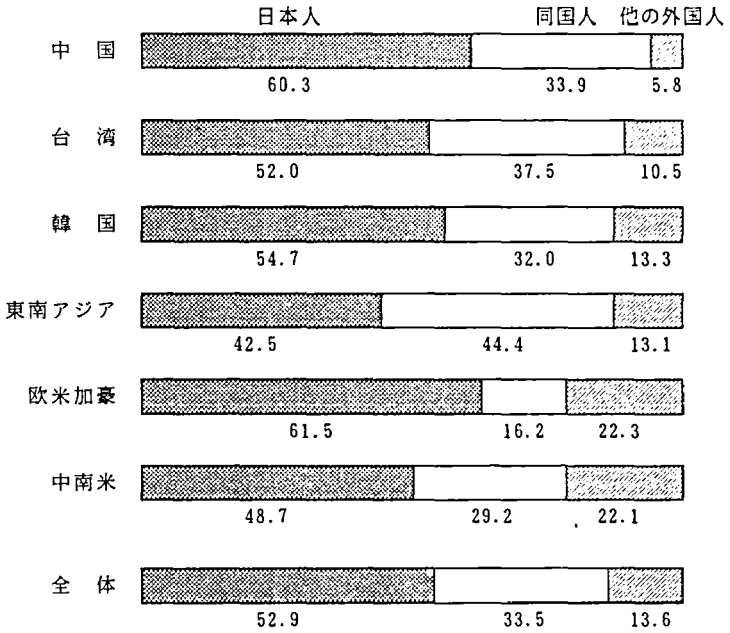

Fig.12. 回答者の出身地別にみた大切な関係にある人の国籍（%）（複数回答）

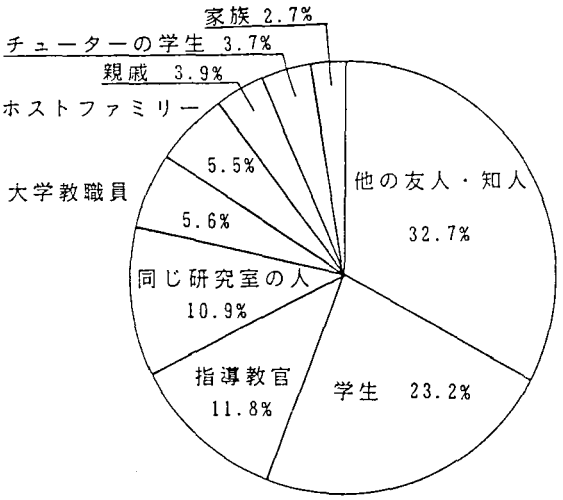

Fig.13. 大切な人との関係（複数回答）

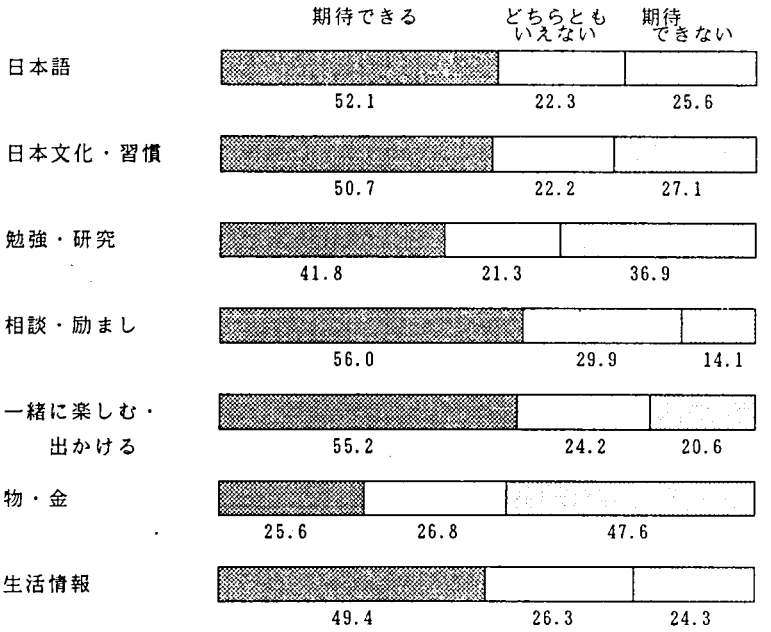

Fig.14. 援助に対する期待（%）（複数回答）

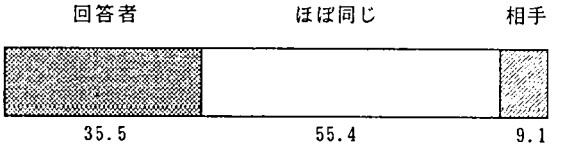

Fig.15. 依存度の高い対象（%）（複数回答）

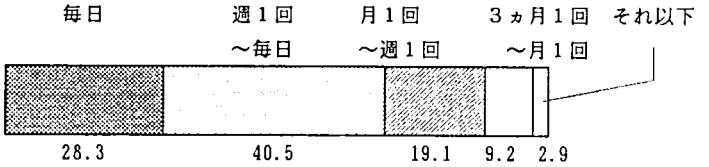

Fig.16. 接触頻度（%）（複数回答）

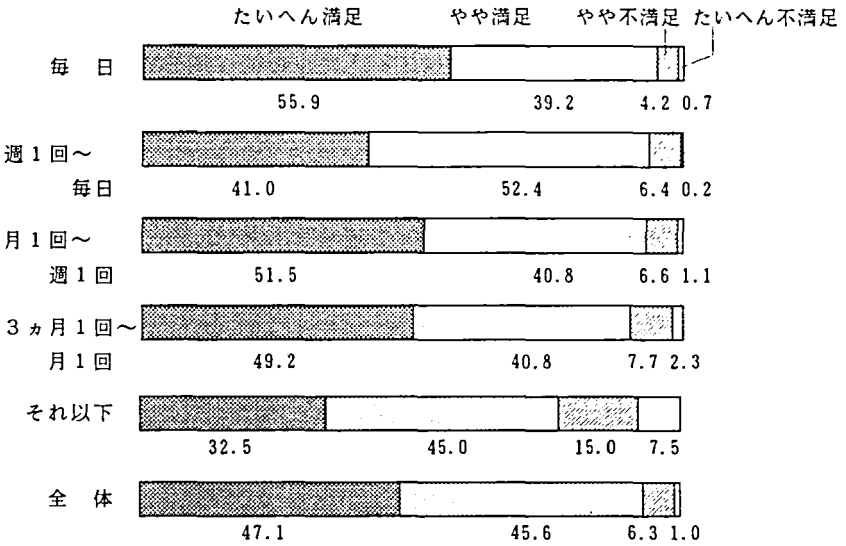

Fig.17. 接触頻度別にみた関係の満足度（%）（複数回答）

3．異文化適応尺度の構造

(1) 各尺度の下位構造

本調査では，異文化適応を測定する尺度として，ストレス，適応，孤独感，対人志向性，不適応症状，ストレス対処，およびソーシャル・スキルを測定する尺度項目を用いた。まず，ここでは各尺度の下位構造を明らかにするために，ソーシャル・スキルを除く各尺度に対して主因子法による（２因子以上の構造であると判断した場合にはバリマックス回転を行った）因子分析を行った。ソーシャル・スキル測定項目は２項目だけであったので，ピアスンの積率相関係数により項目の一致性を検討した。

Table 2. には，ストレス評価項目に関する因子分析の結果が示されている。この表に示されるように，ストレス評価項目は２因子構造であり，第Ⅰ因子は「対人ストレス」，第Ⅱ因子は「日常生活ストレス」に関する因子と考えられる。適応評価項目の因子分析の結果を示すのが Table 3. である。この表からも明らかなように，適応評価項目は３因子構造であり，第Ⅰ因子は「日本語文化」，第Ⅱ因子は「研究」，第Ⅲ因子は「健康・人間関係」に関する因子と考えられる。Table 4. には孤独感尺度に関する因子分析の結果が示されているが，この尺度は１因子構造であると考えられる。

対人志向性評価項目の因子分析結果を示したのが Table 5. である。表にも示されるように，「ものごとの成功，不成功は，自分/状況しだいだと思う」という項目以外は第Ⅰ因子に高負荷を示しており，これら４項目が対人志向性を表していると考えられる。Table 6. には，不適応症状評価項目に関する因子分析の結果が示されている。この表に示されるように，不適応症状評価項目は２因子構造であり，第Ⅰ因子は「心身の不適応」，第Ⅱ因子は「満足感」に関する因子と考えられる。また，ストレス対処項目の因子分析結果を示したのが Table 7. である。表にも示されるように，ストレス対処項目は２因子構造であり，第Ⅰ因子は「セルフ・コントロール型対処」，第Ⅱ因子は「依存型対処」に関する因子と考えられる。

また，ソーシャル・スキルを測定した２項目については，ピアスンの積率相関係数を算出したところ，$r = .33$（$p < .01$）という有意に高い正の相関関係が得られた。

Table 2.　ストレス評価項目に関する因子分析の結果

ストレス評価項目	Ⅰ	Ⅱ
外国人として特別視されること	.76	.05
日本人とよい関係を保つこと	.73	.04
日本人学生との人間関係	.72	.27
日本人との話題のくい違い	.65	.29
日本人に無視されること	.56	.31
日本人の曖昧な表現に対する理解	.54	.31
生活上の情報を手に入れることの難しさ	.23	.72
日本語を勉強する機会を見つけられないこと	.29	.66
日常生活に必要な仕事	-.04	.66
外は日本語の世界だということ	.29	.63
緊急事態に対する不安	.40	.41
固有値	3.04	2.31

Table 3.　適応評価項目に関する因子分析の結果

適応評価項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
日本語の習得	.91	.16	.05
日本文化の習得・理解	.86	.16	.25
学習・研究の進み具合い	.18	.90	.09
学習・研究のしやすい環境	.14	.84	.29
心身の健康	.03	.14	.89
人間関係	.28	.22	.75
固有値	1.70	1.62	1.51

Table 4.　孤独感尺度に関する因子分析の結果

孤独感尺度	I
仲間はずれにされている	.84
誰とも親しくない	.80
気心の知れた人がいない	.78
引っ込み思案で惨めに感じる	.77
頼りにできる人がいない	.77
人との付き合いがない	.69
固有値	3.62

Table 5.　対人志向性評価項目に関する因子分析の結果

対人志向性評価項目	I	II
人と一緒－一人でマイペース	.81	.04
多い－少ない（日本の友人）	.64	-.05
多い－少ない（本国の友人）	.54	.24
外で活動－家で静かに	.66	-.09
自分－状況（成功の帰属）	-.01	.97
固有値	1.80	1.01

Table 6. 不適応症状評定項目に関する因子分析の結果

不適応症状評定項目	I	II
不安な感じ	.79	-.12
疲れ	.70	-.26
イライラした気分	.67	-.33
ホームシック	.58	.06
体の不調	.55	-.41
留学生活の満足感	-.12	.84
生活の心地よさ	-.14	.80
固有値	2.25	1.70

Table 7. ストレス対処項目に関する因子分析の結果

ストレス対処項目	I	II
求めることを変える	.75	-.03
気晴らしをする	.65	.36
自分を変える	.61	-.21
趣味・勉強に打ち込む	.52	-.16
泣いたり日記を書くことで気持ちを外に出す	.02	.78
助言・助けを求める	-.19	.67
固有値	1.67	1.26

(2) 異文化適応尺度の全体構造

上記の結果に基づいて，各尺度ごとにそれぞれの因子に高負荷を示した項目の平均評定値を算出し，その因子の因子得点とした。また，ソーシャル・スキルについては，測定した2項目の平均値をソーシャル・スキル得点とした。本研究ではこれらが異文化適応に関する下位尺度であると考え，次にこれら尺度の全体構造について検討した。

各下位尺度の得点を標準化し，これに基づき因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行った結果，Table 8. にみられるような構造が示された。第Ⅰ因子には，対人ストレス，日常生活ストレス，孤独感などが正の高負荷を示しており，「一般的な不適応」を表す因子と考えられる。第Ⅱ因子に正の高負荷を示しているのは，セルフ・コントロール型ストレス対処，研究に関する適応，健康・人間関係に関する適応，負の高負荷を示しているのは帰属の項目（負の負荷量は自分への帰属を意味する）であり，「セルフ・コントロール型適応」に関する因子と考えられる。第Ⅲ因子には，対人志向性，満足感，健康・人間関係に関する適応が正の高負荷を，また心身の不適応が負の高負荷を示しており，「親和型適応」に関する因子と考えられる。また第Ⅳ因子に正の高負荷を示しているのは依存型ストレス対処と日本語文化に関する適応であり，「依存型適応」に関する因子と考えられる。

Table 8.　異文化適応尺度に関する因子分析の結果

適応尺度	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
対人ストレス	.82	-.26	-.01	.05
日常生活ストレス	.79	.13	-.03	-.06
孤独感	.67	-.19	-.11	.01
ソーシャル・スキル	-.37	.36	.28	.26
日本語文化に関する適応	-.54	.06	.18	.54
セルフ・コントロール型ストレス対処	.23	.73	.03	-.05
健康・人間関係に関する適応	-.42	.54	.43	.11
研究に関する適応	-.30	.53	.11	.34
帰属（状況／自分）	.20	-.50	.06	.17
対人志向性	.21	-.10	.77	.15
満足度	-.30	.29	.49	.04
心身の不適応	.44	-.05	-.65	.33
依存型ストレス対処	.08	-.07	-.02	.84
固有値	2.87	1.71	1.58	1.36

以上の結果が示すように，異文化適応に関連すると思われる各尺度の下位構造が明らかにされた。さらにこれらを下位尺度として異文化適応尺度の全体の因子構造を検討した結果，「一般的な不適応」，「セルフ・コントロール型適応」，「親和型適応」，「依存型適応」と解釈される4つの因子が抽出された。こうした結果に基づいて，今後はこれら多側面から捉えられる適応要因がどのように関係づけられるのか，またデモグラフィック要因の関数として留学生の適応状態の量的ならびに質的な違いを明らかにしていく。

本研究の一部は，松下財団1990年度（第1次）研究助成（「アジア系留学生の異文化適応促進のためのソーシャル・スキル・トレーニング」代表者　藤原武弘）の援助を得て実施された。

引用文献

Baker, R.　1981　*FSA* (*Freshmen's Scale for Adjustment*).　Research manuscript: Clark University.

藤原武弘・来島和美・神山貴弥・黒川正流　1987　独居老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査的研究，広島大学総合科学部紀要Ⅲ，11,43-52.

ヒックス　J. E. 1988　日本における外国人留学生の適応に関する研究－対人関係を中心として－　広島大学大学院博士学位論文

広沢俊宗　1985　孤独の原因，感情反応，および対処行動に関する研究(1)　関西学院大学社会学部紀要，51,157-168.

姚霞玲・松原達哉　1990　留学生のストレスに関する研究(1)－生活ストレッサーを中心に，学生相談研究，11,1-11.

岩男寿美子・萩原　滋　1977 a　在日留学生の対日イメージ(1)：第一次調査資料と若干の考察　慶応義塾大学新聞研究所年報，8,9-13.

岩男寿美子・萩原　滋　1977 b　在日留学生の対日イメージ(2)：*SD*プロフィールの検討　慶応義塾大学新聞研究所年報，9,27-72.

岩男寿美子・萩原　滋　1978　在日留学生の対日イメージ(3)：滞日期間を伴う変化　慶応義塾大学新聞研究所年報，10,15-29.

岩男寿美子・萩原　滋　1979　在日留学生の対日イメージ(5)：パネル・スタディ　慶応義塾大学新聞研究所年報，13,21-50.

岩男寿美子・萩原　滋　1987 a　在日留学生の対日イメージ(6)：10年後の再調査　慶応義塾大学新聞研究所年報，28,63-81.

岩男寿美子・萩原　滋　1987 b　在日留学生の対日イメージ(8)：出身地域による違い　慶応義塾大学新聞研究所年報，29,33-53.

岩男寿美子・萩原　滋　1987 c　在日留学生の対日イメージ(9)：滞日期間，日本語能力による違い　慶応義塾大学新聞研究所年報，29,55-75.

岩男寿美子・萩原　滋　1988 a　在日留学生の対日イメージ(10)：愉快・不愉快なできごとの分析　慶応義塾大学新聞研究所年報，30,21-40.

岩男寿美子・萩原　滋　1988 b　在日留学生の対日イメージ(11)：日本人の好む外国人　慶応義塾大学新聞研究所年報，31,35-52.

モイヤー康子　1987　心理ストレスの要因と対処の仕方－在日留学生の場合－　異文化間教育，1,81-97.

佐藤真一・長田由紀子・矢冨直美・岡本多喜子・巻田ふき・林洋一・井上勝也　1989　中・高年における生活の志向性と満足度，老年社会科学，11,116-133.

Takai, J. 1988 The adjustment of international students at a third culture-like academic community in Japan(1): A longitudinal study. *Human Communication Studies*, 17,113-120.

高井次郎　1989　在日外国人留学生の適応研究の総括　名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科, 36,139-147.

上原麻子　1988　留学生の異文化適応　広島大学教育学部（編）　言語習得及び異文化適応－理論的・実践的研究　広島大学教育学部

山本多喜司　1986　異文化環境への適応に関する環境心理学的研究　昭和60年度科学研究費補助金研究報告書